季刊誌ＣＥＬ４７号
「ＣＥＬからのメッセージ」

大阪ガス　エネルギー・文化研究所副所長
安達　純

私たちが未来への道を歩もうとするとき、方法は３つある。

ひとつは、過去ときっぱり訣別し、これまでとは全く異なる方角に向かって思い切り跳ぶことである。もうひとつは、その反対に、過去の方に顔を向けたまま、後ずさりに恐る恐る足を運んでいくことである。第３の道は、そのいずれとも違っている。過去と現在をしっかり踏まえた上で、それを乗り越えることによってはじめて未来は切り拓かれる、と考えることである。

季刊誌ＣＥＬ４７号ならびに次号で試みようとしたのは、私たちがどこまで歩みを進め、今どのような地点に立っているのかを確認することである。２１世紀に通じる新しい道を探るために、今ここで「明」と「暗」の両方の視点から、公平に、これまでの到達点を評価しておくことが不可欠と考えたからである。

しかし、本当の課題はその先にある。このあと私たちが、未来に向けて一歩を踏み出すためには何が

必要なのか。「物の豊かさ」から「心の豊かさ」へと軸足を移すことだ、とはよく言われることである。確かにそうであるかもしれない。けれども、どうしたら「心豊かな社会」を実現できるか、という方法論についての議論はまだ不十分である。それればかりか、そもそも社会の成り立ちそのものに不安が生じている。すなわち、目下の景気の問題であり、もう少しスパンを長く取れば、「持続可能な成長」の問題である。

ＣＥＬは今から７年前の創立５周年に、「ジオカタストロフィー」（人類破滅の可能性とその回避のシナリオ）研究に取り組み、その成果を世に問うた。２１世紀を目前にして、「心豊かな社会」への方途を探るとともに、その基盤となるべき「持続可能な成長」の課題についても、ＣＥＬとして、本腰を入れて取り組むべき時期を迎えているのではないかと思う。

そうした時期にＣＥＬは、９月１日付で研究主幹として濱　恵介を、１０月１日付で豊田　尚吾を新たに迎え入れた。

濱は長年、住宅・都市整備公団で集合住宅の設計・開発に携わった住まいづくりのエキスパートであり、また、フランス留学およびインドネシアでの技術協力の経験を持つ国際派でもある。主に「環境問題と都市居住」という視点からの研究に取り組む予定で

ある。

豊田は（社）日本経済研究センターや大阪大学大学院・国際公共政策研究科博士課程などで公共経済学を学んだ、特に計量モデル分析のエキスパートである。そして、とかく効率性に偏重しがちな経済学にも哲学（規範）が必要ではないか、といった考え方の持ち主である。

前号でご紹介したエネルギーの専門家である宮本に続いて、新たに住まいづくり、経済の専門家がメンバーに加わったＣＥＬは、今まで以上に多角的・総合的な研究に取り組む体制が整いつつある。ＣＥＬの力を結集して、日本社会の根本に横たわる問題に挑戦していきたい。